

レーニンとジノヴィエフの 『流れに抗して』

小 島 仁
阿 部 憲 治

目 次

- I. はじめに
- II. 序文（レーニン）
- III. 前置きにかえて（ジノヴィエフ）
- IV. 流れに抗して（ジノヴィエフ）
- V. 『流れに抗して』・目次
- VI. 論文の掲載誌紙についての解説
- VII. 『レーニン全集』との照合

I. は じ め に

レーニンとジノヴィエフが第一次大戦中にロシア国外で発表した論文をまとめて論文集『流れに抗して』を刊行したことは有名である。レーニンはその著『帝国主義論』の序文（ペトログラード、1917年4月26日付）の中でこの論文集について次のように述べている。

「こんにち自由の日に、ツァーリズムの検閲を考慮してゆがめられ、鉄の万力によって押しつぶされ、締めつけられた個所を読みなおすことは苦痛である。帝国主義は社会主義革命の前夜であること、社会排外主義（口さきでは社会主義、行動では排外主義）は社会主義にたいする完全な裏切りであり、ブルジョアジーの側への完全な移行であること、労働運動のこの分裂は帝国主義の客観的条件と関連するものであること、等々を、私は『奴隷の』言葉で語らなければならなかった。それで私は、この問題に関心をもつ読者には、1914～1917年に私が外国で書いた論文

の、まもなく出る再版を参照していただかなければならない。」(レーニン、『帝国主義論』、国民文庫、副島種典訳、8—9ページ)

註

原田三郎・庄司哲太、『帝国主義論コメンタル』(1976年)は上記引用文中の「1914～1917年にレーニンが外国で書いた論文の、まもなく出る再版」を、1918年3月にレーニンがその序文を書いている『流れに抗して』を指しているものとする(5ページ)。なお、『流れに抗して』に収められている論文以外のものも含めて、上記引用文中でレーニンが参照を求めている諸論文の性質について、原田・庄司、同書5—6ページでは系統的に整理・紹介している。

ところがこの有名な論文集が具体的にはどのような内容のものであるかについて、日本では一部の研究者以外にはあまり知られていないようにおもわれる。私達二名は、所持している『流れに抗して』(ドイツ語版。1921年。ハンブルク)を基に、そのおおよその内容の紹介を試みることにした。また併せて、今までに知りえたことを付記しておくことにした。

私達が所蔵しているドイツ語版『流れに抗して』の表題はつぎのとおりである。

N. Lenin, G. Sinowjew, Gegen den Strom.
Aufsätze aus den Jahren 1914—1916. 1921,
Verlag der Kommunistischen Internationale.
Auslieferungsstelle für Deutschland: Carl Hoym
Nachf. Louis Cahnbley. Hamburg.

試訳するなら、「エヌ・レーニン、ゲー・ジノヴィエフ共著、『流れに抗して。1914—1916年の論文集』1921年、国際共産主義出版社。ドイツでの配布所は、ルイス・カーンブレイの後継者、カール・ホイム。ハンブルク」

私達は国会図書館と北海道大学付属図書館でも『流れに抗して』をみつけたが、両館とも1921年のドイツ語版のみを所蔵している。なお、『レーニン全集』(邦訳 大月書店)第27巻、226ページには、ペトログラード労働者・兵士代表ソヴェト出版部版、1918年発行の『流れに抗して』が存在する旨、しるされている。

邦書でも『流れに抗して』という題の本がある。レーニン著、村井

レーニンとジノヴィエフの『流れに抗して』

繁訳、『流れに抗して』彰考書院、1952年（国会図書館蔵）である。この本は「訳者のことば」の中で、「本書はロシア版レーニン全集（第3版）の第18巻のほとんどの全訳である。」「所収の論文のさいしょのものが執筆されたのは1914年9月であり、さいごのものは1915年12月である。」「『流れに抗して』という表題は、1914年11月から1916年10月までのレーニンおよびジノヴィエフの論文を集めた著書『流れに抗して』より取ったものである」としてあるように、結果的にはレーニンとジノヴィエフの『流れに抗して』中のレーニンの論文と同一のものがかなり収められてはいるが、レーニン・ジノヴィエフ『流れに抗して』とは別の本である。なお、国会図書館での文献調査について、佐久間隆人君（関東学院大学院生・経済学研究科）の御協力を得た旨、付記しておく。

『流れに抗して』（1921年、ハンプルク）は、まず、「翻訳権所有者フリダ・ルビナー（Frida Rubiner）博士による翻訳」とするされ、ついで「年代順に整理された内容目次」、レーニンの「序文」、ジノヴィエフの「前置きにかえて」、本文、「人名索引」、「雑誌・新聞の目録」、「代表者会議と大会」の順になっている。これを私達は、つぎのようにして紹介する。

- Ⅱ．レーニンの「序文」全訳。
- Ⅲ．ジノヴィエフの「前置きにかえて」全訳。
- Ⅳ．本文の中の最初の論文で、この本の題名の基ともなった、ジノヴィエフの「流れに抗して」全訳。
- Ⅴ．目次。全訳。
- Ⅵ．論文の掲載誌紙についての解説。
- Ⅶ．本書中に収録されているレーニンの諸論文の、『レーニン全集』との照合。

私達は社会思想史の専門家ではないから、これは不手際な紹介文にすぎないだろう。私達の仕事の不手際や、私達が気がつかない事実やについての御忠告をお聞かせいただけると幸である。この論文集の意義についても、また以下に紹介する文章の内容の評価についても、私達は多弁を弄しないことにする。私達の目的はこの紹介文によって読者自身が原典に近づく機会を速めることである。

訳文については、つぎのような工夫をした。

- 1) 訳文の基になったドイツ語版本のページを示した。そのページの最後の文章またはつぎのページにまたがる文章の末尾に、かっこ書きして、何ページから何ページにかわるむねをしるした。
- 2) それ以外のかっこ書きは、ドイツ語文中でもかっこ書きされていたものである。
- 3) 訳文はできるだけくだいた、分りやすいものにした。ながい文章はいくつかの短文に分けるようにした。
- 4) 原文で斜字体または隔字体の語はゴシックで印刷した。

なお、各部分について気のついたことをしるしておく。

「II. レーニンの『序文』」について。『レーニン全集』(邦訳、大月書店)第27巻225ページには、「論集『流れに抗して』の序文」として、内容的に同一の一文がのっており、それが1918年3月に執筆(226ページ)されたとしてある。『レーニン全集』第27巻中の一文と私達が紹介しているドイツ語版とのちがいは、次の二点である。

第一に、大月書店版が示している執筆日付(1918年3月)がドイツ語版では示されていない。

第二に、大月書店版で「ただ一つ、大きな雑誌論文が雑誌『コムニスト』(1915年、スイスでただ一号だけ発行)からとってある」としてある文は、ドイツ語版のばあい、「1915年」ではなく「1916年」である。

「V. 目次」について。目次を一見すれば分かるように、本書の内容はレーニンとジノヴィエフによってほぼ交互に書かれた74篇の論文から成り立っている。論文は年代順に排列されているが、二カ所だけ狂いがある。論文のいちばんはやい日付は1914年11月1日、いちばんおそい日付は1917年1月31日である。74篇の論文のほとんどは『ソツィアルデモクラート』第32号～第58号、および同論集第1号～第2号に載ったものであり、4篇のみが『コムニスト』第1・第2合冊号に載ったものである。

『ソツィアルデモクラート』と『コムニスト』については、VIに解説文を引用しておく。『ソツィアルデモクラート』紙と『コムニスト』誌に接見すれば、ロシア語文で『流れに抗して』の内容を復元しうるわけである。なお、私達は目次を訳出するさい、いちいちの項目について本文中に示されている詳しいタイトルの訳文を示しておいた。目次に示されている

タイトルは本文中のタイトルより簡単になっている。Ⅶのような照合作業をおこなうためにも、フル・タイトルの方が便利である。

Ⅶの照合作業の結果、レーニンの論文はほとんど『レーニン全集』各巻中に見出されたが、一つだけ不明のものが残った。第9番目の論文、「インターナショナルと祖国防衛」（『ソツィアルデモクラート』第35号）1914年12月12日付、である。

(1980. 9. 30)

Ⅱ. 序 文 ^(註)

ここに集録された論文の大部分は、(ロシア社会民主労働党・ボリシェビキ・の中央機関の)『ソツィアルデモクラート(社会民主主義者)』に発表されたものである。この『ソツィアルデモクラート』は1914年の末から1917年のはじめにかけてはスイスで発行された。ただ、かなり大部の論文で(1916年に一冊だけスイスで発行されたところの)雑誌『コムニスト(共産主義者)』に収録されたものがある。

個々の論文の間の関連を正しく理解するためには、それらが機関紙に発表された年代順が顧慮されねばならない。

諸論文は二つの基本的なカテゴリーに分かれる。第一の部分は、戦争の評価と、それから帰結される政治的課題に対する評価とに充てられている。第二の部分は、党内の諸関係と、党内諸分派との斗争を取扱っている。近視眼の者には久しくこの斗争は「混乱」あるいは「私闘」と見えたが、実際には今では誰でも見とおしているように、この斗争は実際の社会主義者をリーパー、ダン、マルトフ氏らとその仲間のようなブルジョアの下男から区別したのであった。

もちろん諸論文の第一の部分ないしは第一のカテゴリーの方がいっそう重要な意義をもっている。これら諸論文を識ることなしには、階級意識に目覚めた労働者たる者として、国際社会主義革命の思想の発展と1917年10月25日のその最初の勝利との意義を**把む**ことができないであろう。

エヌ・レーニン

(すべてⅦページ中に)

註

『レーニン全集』第27巻（邦訳、大月書店）225 ページには、レーニンの「論集『流れに抗して』の序文」がのっており、それは1918年3月に執筆されて、ペトログラード労働者・兵士代表ソビエト出版部版、論集『流れに抗して』1918年、に発表されたものを、論集のテキストによって印刷したものである（同書226 ページ）、と書かれている。

Ⅲ. 前置きにかえて

この論文集のなかに収められている諸論文は、同志レーニンと私とがその亡命時代中の1914年9月から1917年2月までの間に書いたものである。戦争勃発のさい、我々はガリシアにいた。できるだけロシア領に近いところにいるために、そして、その当時ペトログラードで発行されていた『プラウダ』の仕事を手伝うために、我々はその当時ガリシアで生活していたのである。たいへん苦勞して我々は中立国スイスに到達することができた。そして我々はスイスで、（当時の我々の党の中央機関の）『ゾチアルデモクラート [社会民主主義者]』を再び刊行しはじめ、そのうえさらに雑誌『コムニスト [共産主義者]』を一号だけと、『ゾチアルデモクラート・論集』を二冊発行した。

我々はこの、1914年9月から1917年2月までの諸論文の中の最も重要なものを、変更を加えることなしに提供する。これらの諸論文の中で同志トロッキーと論争していた点についても、なんらの変更も加えない。とはいえトロッキーとの論争は今ではその現実的意義を大部分失っているのではあるが。

『流れに抗して！』。我々の論文集はこう命名される。我々は小グループとして社会排外主義に対する闘争を開始した。祖国防衛という濁流があらゆる国々の労働者組織を呑みこんでしまうし、ドイツではカール・リープクネヒトその人でさえも公然と戦債に反対する発言をしてはいない。そのようなときに我々はこの闘争を開始していた。

初めてツインメルヴァルトで、我々は他の国々の断乎たる国際主義者たちの小グループとともに、国際主義者の最初の固いケルンを築くことができた。ツインメルヴァルト左翼は、当時数の上ではわずかの勢力でしかなかった。そして、打ち明けて言うなら、ロシアの国際主義の代表者は、大衆から離れたグループとして、かなりの数の労働者大衆を代表しているというのではない亡命者のサークルとして、評価されていた。

だがさらなる事件の経過が示したところでは、じつはこの評価がまちがっていて、我々は当時すでに疑いもなくロシアプロレタリアートのきわめて広い範囲の正しい声を表現しており、我々は当時すでにロシアの階級的に自覚した労働者の最良の部分の念頭に浮ぶところの流れを目立たせていたのである。

この箇所を書いているとき、わたくしは戦争が始った時ヴィクター・アドラーと会見したのをありありと想いだす。年老いた、経験深い、練達の日和見主義者、ヴィクター・アドラーは、我々を成人した子供を扱うように取扱った。彼の言葉のそれぞれからは、彼が我々のことをこう考えているかのように思われた。この革命家達は監獄と追放はよく知っているだろうが、この「空想家達」の後に多数の範囲の労働者が従ってゆこうとは私（つまりこの老骨）には決して信じられはしない、と。だが事件の進行は国際日和見主義の老指導者の懐疑論を否定した。諸事件が示したところでは、まさに我々「空想家達」は我々の国の被抑圧階級の血液中の血液だったのであり、危機の時代の全人類のために我々の国の幾百万人の工場労働者達の声や希望を一つのことで表現することは可能だったのである。(Ⅸページ→Ⅹページ)

戦争が始った時には、我々の声はさびしくひびいた。ロシアからの反響は、この遠い流謫の地ではまばらにしかひびかなかった。はじめの頃には、「祖国防衛」の理念は我々の国でも頭をもたげた。まさにブルジョアジーとツァーリズムの見通しの利く追従者達が、我々の「祖国防衛主義者」をいろいろな仕方でも支援した。ロシア社会民主主義労働者党の指導により、亡命者の中で即刻新しいグループを作ることが承認された。プレハーノフは、最も狂信的な愛国者の群に移行した。はじめは、我々はそのことを信じたくもなかった。プレハーノフがニコライ・ロマーノフによってひき起された戦争における「祖国防衛」の傾倒者だといううわさがどこまで本当なのかを確かめるために、同志レーニンと私が、プレハーノフの最初の講演を聞くためにわざわざローザンヌへ旅立ったのを想いだす。我々はプレハーノフの話聞いて我が耳を疑った。だが、このローザンヌでの講演を聞いてはっきりした。プレハーノフはもはや社会主義にとっては失われたものであった。このことは我々に、この戦争によってひき起こされた社会主義の危機がいかに大きなものであるかをくり返して示した。プレハーノフがここまで行けるのなら、と我々は自問自答した。ドイツではシャイデマンとその輩がもっと墮落しているとしても不思議はない、と。

さらに新たな諸打撃がつづいた。フランス労働運動の昔からの指導者グストが、フランス帝国主義の代理人達の中に加わった！ 「社会主義的組閣」とながい間闘ってきたグストが、自から帝国主義的・掠奪的戦争をおこなう政府の大臣になった。

グストに続いてカウッキーだ！ カウッキーは戦争のはじまる二、三年以前に、全盛期にはそのため多くの文筆活動をおこなったところの革命的マルクス主義の従前の立場を離れたことを、その全文筆活動を以って示した。カウッキーが、私の記憶では1910年に書いた小冊子「権力への道」は、真正の革命的マルクス主義の理論家としてのカウッキーの最後の著作であった。その後カウッキーはますます斜面を滑り落ちた。革命的マルクス主義と日和見主義のあいだに「仲裁線」を打ちこむために骨折ったいわゆる「中央派」というグループを、彼は作った。「バーデンとルクセンブルクの間」と、新聞では、カウッキー自身が彼の姿勢を特徴づけていた。バーデンはドイツ日和見主義の中心である。マルクスの故郷（トリエル）はバーデン大公国とルクセンブルク大公国の中間にある。カウッキーはこの言葉によって、彼の姿勢が、ドイツでは同志ローザ・ルクセンブルクによって代表される極端な左翼をも拒絶しているのとおなじ程度で、日和見主義の「弊害」を拒絶している、と言おうとした。ローザ・ルクセンブルクとそのグループを「アナルコサンジカリズム的グループ」として言明しようとするカウッキーの試みがいかに不正でいかに根本的な誤りであったかを、戦争中の数年は明白に示した。戦争中の数年は、まさに同志ルクセンブルクのグループこそがドイツにおいて革命的マルクス主義の確実な支えであり、かつ、ありつづけていることを、ありありと示した。

読者はこの論文集から、我々が1914年から1917年までの文筆活動において「中央派」との斗争、特にカウッキーの述作、にとりわけ多くかかわっているのを見てとることだろう。だが、それには何の不思議もない。それはこの数年間の国際社会主義の状況そのものから生じざるをえないことなのだ。すでに1912年に、ローザ・ルクセンブルクがつぎのような批評を書き遺したことがある。修正主義に対する理論斗争が報われることがあるとするなら、それはただ、マルクス主義的「文字」のかけに隠れた修正主義に対する理論斗争のみがそうである、と。そしてカウッキーの理解はまさにマルクス主義者の慣用語によって隠された修正主義以外の何者でもない。（X ページ→XI ページ）

この危機の時代に、「中央派」の政策が労働運動に加えた損害はとりわ

け大きかった。あらゆる側から、我々はこう問いかけられたのである。日和見主義とはいったい何だ。社会主義の裏切りとはいったい何だ。グストやカウッキヤブプレハーノフが今や祖国防衛の原則に従っているというのに、と。以前のインターナショナルの以前の代表者の権威は、ドイツのシャイデマン輩、フランスのレノルズ輩、イタリアのムッソリーニ輩、オーストリアのヴィクター・アドラー輩とレンナー輩が我物としていたブルジョア政策の意を迎えている。今こそ最強力の敵と闘うべきときだ。今こそ彼等の以前の後光の支えでマルクス主義を最も恥知らずなしかたで歪め、労働者達を祖国防衛の輓にむりやりつなごうとする者どもの仮面をはがすべきときだ。

ドイツのブルジョアジーは彼等の先見の明ある代表者の状態の中ですぐにつぎのような明白な真実をつかんだ。我々の日々の共同の働きで作られたツインメルヴァルト左翼が、芽生えつつある第三インターナショナルの最初のケルンを築くものである、と。我々はドイツ語ではほんの二、三の出版物しか公刊できなかった。レーニンと私によって書かれた『社会主義と戦争』は、ドイツでは非合法に流布された。オランダの友人（ヘンリエット・ローランホルスト）や、ポーランドの社会民主主義者や、スイスの社会主義国際主義者達と共同で、我々はチューリヒで新聞『フォルボーテ（先駆）』を三号出した。そのほかに、本書の著者たちが能動的に参加していたツインメルヴァルト左翼のビューローは、ドイツ語で二、三のアジテーションおよび綱領のパンフレットを公刊した。ドイツの国民主義的自由主義あるいは保守主義の教授連はこのわずかの文にひじょうに詳しく注意を払った。この文献のために大さわぎしたのはドイツ帝国主義者の新聞と雑誌ばかりではない。ドイツ帝国主義の出版界の代表者はこの文献に対して著書まで献げてくれたのだ。他の国々の帝国主義者達の参加の下で始められたこの帝国主義戦争が、不可避免的に「赤い共産主義の亡霊」を地下から呼びおこすだろうことを、この人人は十分に明白に知っていた。彼等は国際社会主義の陣営の議論を注意深く追求し、間もなくその最初の危険な徴候に気づき、警鐘を鳴らした。ドイツの進歩的ブルジョアと愛国主義の新聞が我々とツインメルヴァルト左翼について広く知らせたがった内容は、べつにウソでも中傷でもない。ところで公平のために言うておくと、フランスのブルジョア的・愛国主義的新闻のふるまいにはおよそ自覚というものがない。彼等は熱心にドイツの同類に共鳴していた。ホモという名（グルンバッハ）の者がいて、(当時フランス『社会主義者』・日和見主義者の中央機関の)

ユマニテの側に立って毎日ウソをつき、ツィンメルヴァルト左翼をまるで中傷することが善行を重ねているものと思こんでいるかのような様子で熱心に中傷した。

だが次第に、あらゆる国々の社会主義的国際主義者達の同情は、ツィンメルヴァルト左翼に集った。ツィンメルヴァルトでの最初の会議の時には、同志ラコフスキーのような指導者や同志ローランホルストのような指導者さえ我々に反対していた。ツィンメルヴァルトでは同志セラティによって代表されていたイタリアの国際主義者達もまた、この最初のツィンメルヴァルト会議では我々にある種の異議を唱えた。ドイツの社会主義的国際主義者からは、すぐには一人の代表が我々に与して来たただけだが、やがて他の人々もだんだんと近付いてくるようになった。当時ロシア国外に住んでいたアクセルロードやマルトフやの著名なメンシェビキ達は、ツィンメルヴァルト左翼が他の国々の社会主義者の間で信用を落とすようにするために彼等の永年にわたる結びつきを活用した。

(Ⅺページ→Ⅻページ) ロシアから故意の情報をもたらすことによって、彼等は次のようなことをやりとげた。西欧のすなおな社会主義・国際主義者達の多数は永い間、作り話によって、ロシアでは労働者の大部分は国際主義者には従わず、せいぜいが「中央派」の政治家に従っているのだと信じこまされていたのである。1917~18年の事件によって、結局我々の同志達も、ロシアの労働者達がほんとうは誰についていたのかははっきり分かったのではないか。

「**帝国主義戦争を内乱に転化せよ**」。これが開戦と同時に我々が提起したスローガンであった。以前からの社会主義の代表者達はこのスローガンについて何事も知ろうとはしなかった。我々は今でも生き生きと記憶しているのだが、ロベルト・グリムは我々の中央委員会の戦争にかんする最初の宣言の公表を否定し、それについて次のように主張した。帝国主義戦争の内乱への転化について、言ってみるなら、それこそまさに「アナーキズム」である。と。まさに、流れに抗して闘うべきときであった。まさに、困難な状況にあって最初の畝を作るべきときであった。

最初のツィンメルヴァルト会議の間に、「領内平和などではなしに、内乱こそ我等の合言葉である」と結ばれたカール・リープクネヒトの手紙を受取ったときに、我々は最大の道義的満足を得た。もちろんそのためにリープクネヒトはドイツでは「アナキスト」呼ばわりされた。だが当時我々には、ドイツ労働者階級中の誠実無私の部分、リープクネヒトにアナキストの烙印を押した連中にはなく、リープクネヒトに

従っていることが、はっきり分かっていた。

我々が戦争中の最初の二年間にロシアから受取った通信は、きわめてまばらだった。ペトログラードとモスクワで発行された非合法の新聞は、大骨折しなければ入手できなかった。当時ロシアで行われていた党の同志との談合は、ますます困難になっていった。簡単な通信や印刷物がロシアから我々のところへ達するのに数ヶ月を要した。戦争がロシアではツァーリズムの没落を意味するということは、最初から我々にとってははっきりしていた。ところで1915年のおわりに、革命的危機がたいへんな素早さで前進していることを示す最初の知らせがロシアから我々の許に届いた。1915年の10月に、近づきつつあるロシア革命のアウトラインは、はじめて多かれ少なかれ判然とした。読者は本書 291 ページの論説『いくつかのテーゼ』を読んでみるがよい。ここで我々は、まだ戦争中に革命によって政権をとるようになったならば、我々の党が何を為さんとするのかという問題を、はじめて提起した。多くの者は、この展望自体が、すなわち我々の党が戦争中に権力を握ることができるということが、全くありそうもないことだと考えていた。西ヨーロッパでは我々の政治的敵はこの問題提起をただ笑うのみであったから、労働者階級と我々の党の戦時中の勝利が彼等には全くありそうもないことが起ったように思えたのである。結果は、懷疑者や不信者を正しいとはしなかった。結果は、我々が正しかったことを立証した。

この戦争で革命によって権力を握ったら、プロレタリアートの党は何を為すのかという問題に、前記のテーゼの中で我々は次のように答えている。我々は、全ての交戦諸国に、植民地の解放と、抑圧された・従属的な・権利を奪われている・あらゆる民族の解放を条件として、平和を申入れる、と。ドイツでも、イギリスでも、フランスでも、その現在の政府によっては、この条件は受入れられまい。だから我々は、革命戦争を準備し、おこなわねばならない。すなわち我々は、我々の最低限綱領を全て、だんことして貫徹しようとするだけではなく、組織的に、もっか大ロシア人によって抑圧されているあらゆる民族、あらゆる植民地、およびアジアの従属的な国々（インド、中国、ペルシア等）を奮起させ、それにまた、まず第一に、社会主義的プロレタリアートが自国の政府・社会的愛国主義者に立ち向かうよう煽動しようとするのである、と。（ⅩⅡページ→ⅩⅢページ）読者は特に「革命戦争を準備し、おこなう」という言葉に注意するがよい。この言葉についてなされた我々の小さな編集局の内部（『ゾチアルデモクラート』の編集員は当時レーニンとジノヴィ

エフだった)での討論のことを、私はよくおぼえている。革命戦争の見通しが現実的なものであろうことには、我々兩人とも反論の余地はなかった。だが、私は当時同志レーニンにこう語った。もし、我々の党がほんの一時期的のみ政権についたり、もし、革命戦争が我々の国の労働者階級の力にあまったり、もし、我々の政府が以前の政府から悪しき遺産を引受けざるをえなかったり、すぐに革命戦争を指導する物的な力が欠けていたり、もし軍隊がぼろぼろだったり、交通困難その他の荒廃があまりにも大きかったり、直ちに革命戦争をおこなうことが語りえないときにはどうしようか、と。そしてこの討論に基いて、「我々は革命戦争をおこなうだろう」と簡単に言うことはしない、「我々は革命戦争を準備し、かつおこなうだろう」と言うのだ、という点で我々は一致した。この準備のためには一定の期間を必要とするだろうということは、我々にとっては当然はつきりしていた。

我々が期待していたとおりになった。最悪の期待が実現した。我々がツァーリズムと8ヵ月間のブルジョア経済と和解者とから引受けた遺産は、革命戦争が不可能であるということを感じかわしげに表明した。ドイツ帝国主義が我々に命ずるきびしい和平条件を、受け入れざるをえなかった。この時期における世界の力関係が我々に不利であるという事情を、考慮に入れなければならなかった。だが革命戦争はなお、来るべき新たな戦争と革命の時代のアウトラインをいっそう明瞭にした。疑いもなく我が世代の社会主義者はこの段階を通過せねばならないし、また同様に明らかなことだが、社会主義はこの斗いに勝利するだろう。革命戦争の展望はすでに1915年の10月に我々によって正しく見通されていた。そしてこの展望は今なお正しい。だがこのことは、我々が**任意のときに**革命戦争をおこなえることを、決して意味しない。時期の選択は我々次第だが、この不可避の、現に来ており、さらに来るであろう革命戦争の開始を、社会主義の利益のためにずらすことに我々の責任がある。

我々はこの文章を1918年3月の末に書いている。1ヵ月以前から我々は再び**流れに抗**している。1ヵ月前から、我々の党の諸隊列とソヴイェト政体の諸隊列の中で、概してほとんど大部分がブレスト和平条約の調印に反対していることは、公然たる秘密である。しかし、苦杯を最後の一滴まで飲んで現在の関係の下で平和条約が批准されるべきであるという最初からの主張が、二、三週間後には優勢な大多数の同志に必ずや支持されるにちがいない。だが少数の同志達がもう一方の極端に陥る危険が存在する。すなわち、有名な「息抜き」があまりにも「こころ広く」解釈

されうる危険が存在している。我々は革命戦争が不可避であるということ、我々自身にも他の人々にも隠蔽してきはしない。(XIIIページ→XIVページ) 新しい一軍隊を作り出すことは、我々の意見ではこの時期において最も重要な課題である。我々は警報を鳴らすのをやめないであろう。すなわち、我々はソヴィエト政体側の一人一人に、新しい戦争が進行中であるということ、新しい戦争が不可避のものであるということ、我々がロシア国内に一個の強力な革命軍を作るときにのみ我々の革命を救うことができるということ、告げ知らせるのに疲れることはないであろう。

我々がこの文を書いている現在、インターナショナルの状態は表面的にはかの1914年の最悪の日々を想起させるふしがある。開戦の際には、インターナショナルが永久に失われたのではないかとする多くの不信家達が現われた。現時点でも、ここかしこに、かつてと同じように絶望的で意気銷沈した感情がよみがえっている。ドイツの労働者階級は我々を機宜よく助けに来はしない。フランスとドイツの労働者達は、ドイツとフランスの帝国主義が虐殺をし続けることを異議なく許している。我々がこの文章を書いているまさにそのときに、独仏戦線でのおそろべき大量の虐殺の報道を電報がもたらしている。パリからほんの数キロメートルのところまで再び激しい戦闘が起っている。労働者階級中の精華が破滅しており、幾万人もの独独労働者がクレマンソー氏やヒンデンブルク氏の掠奪的な計画の犠牲に供されている。ドイツの革命的な運動は、抑圧されてしまったように見える。フランスでは外面的には墓地の静かさが支配している。いかなる怒りの抗議も聞こえてこず、いかなる蜂起のしるしもうかがえない。人類を苦しめてきている帝国主義戦争を解決することは、ほとんど全て独英米国のブルジョア政体の手に委ねられているといった按配なのが現状である。そして多くの自信のない者達は、決定的に重要な国々の労働者達が最後まで無価値のものであり続けるだろうと考えている。多くのいわゆる「冷静な」人々は、インターナショナルがはるか何年も前に終っているものと信じている。ところが、我々はその反対のことを固く信じている。プロレタリアートの国際的な革命は、来ているし、来るだろう。自称社会主義者と以前の公式の社会主義の代表者の圧倒的の大部分は労働者階級の立場を裏切った。カール・リープクネヒト、フリードリヒ・アドラー、マク・レーン等のごく少数の人々のみが社会主義の旗に忠誠を保っていたように往々見える。我々は言おう。夜が暗ければ暗いほど星はいっそう明るく光るのだと。公式の

社会主義者達の裏切が黒ければ黒いほど、社会主義の旗を法外に低めることに対して初めて抗議の声を挙げたこれら少数の人々の名が我々にはいっそう明るく光るのである。しかし、我々はまた同時に、ドイツやフランスやイタリアや、それにイギリスやアメリカやの幾百万人のプロレタリアートのところが、まさにこれらの少数の人々と同じものであると信じている。「流れに抗して」は、今もなお我々のモットーであり続けている。日和見主義と祖国防衛という「流れに抗して」、そして同時に、絶望と懐疑という流れに抗して、現在の苦しい日々、我々は戦わねばならない。我々は今、現に、ここペトログラードに、最も危険な、そしてもっとも責任のある地位のうちの一つを得ている。ロシア共和国の主要地は公式にはモスクワの方に移されているが、ペトログラードのプロレタリアートはなおかつ国際的な革命の前衛であり続けている。そして我々は、あらゆる国々の立派なプロレタリアの心臓がペトログラードの労働者の心臓として搏動しているものと信じている。今のところ、ブルジョアは楽しんでるがよい。あらゆる国々の労働運動の社会排外主義的な流れもまた、今のところ氾濫しているがよい。我々は、国際的な労働者階級を信頼して、つぎのように告げ知らせる。「友よ。流れに抗して舵をとれ！」そして我々は確信している。国際的な革命が事実となる瞬間の来ることを。(XIVページ→XVページ)

すでに我々の1905～06年の革命は、東洋の幾百万人もの人々の目を覚ました。トルコのことだけでも、ペルシアのことだけでも、思い起こしてみるのがよい。1905～06年のオーストリアの労働者の運動を思い起こしてみるのがよい。しかし、1905年の我々の革命は1917～18年の革命に比べれば見戯であった。以前の世界には我々の革命の国際的な諸結果に保護を加えることができるいかなる力もなかった。我々の運動の反響として燃え上ったフィンランドの社会主義的な革命は、我々が明日、あるいは明後日、その他の国々に見出すであろう模範を、断乎として形作っている。ドイツ帝国主義がよしんば明日、社会主義的フィンランドを絞殺するのに成功したとしても、明後日にはドイツ帝国主義がみずから縊死することになるにちがいない。

どんな事態が来ようと、来るがよい。それでもなお我々は、悦ばしい日々生きてゆくであろうから。

1918年3月28日

ゲー・ジノヴィエフ

Ⅳ. 流れに抗して

曾てない困難なときに、我々は『ソチアルデモクラート〔社会民主主義者〕』の刊行を引受けた。我々の党、全労働者、全解放運動、全インターナショナルは、とほうもなく困難な時代に生きている。国際労働者の物的な獲得物ばかりではなく、精神的な獲得物までもが——幾世紀かにわたる堅忍不拔の闘争と苦しい労働の成果であるところの獲得物が——今や安危にさらされている。

日々死の戦野で、あらゆる国々の幾千幾百の社会主義的労働者が、肉体的に滅ぼされているばかりではない。死の世界の代表者による地獄の企てが、ある国の労働者が他の国に生れたその兄弟を殺すように強制されていることによって、我々自らの手により果されているばかりではない。彼等は我々を、精神的にも、士気沮喪させようとしている。彼等は人間による人間支配という腐った政体をその特徴とする怖るべき病いを伝染させようとする、世界史上かつて類をみない大運動をおこなおうと努めている。

この病いの名は、社会排外主義だ。

ところで、ブルジョアジーは常勝の勢いで勝ち誇っていることができる。戦争は巨大な精神的混乱をヨーロッパのほとんどの社会民主主義政党の中にもちこんだ。ドイツの110人の社会民主党の国会議員がフランスとベルギーに対する戦争のための40億マルクの戦債に同意したとき、『フォルヴェルツ（前進）』が労働者新聞では階級闘争について語らぬことというプロシアの將軍の条件に従順に服従したとき、そのことはブルジョアにとって幾多の戦勝と同様の値打がある。全般的追従のとき、社会排外主義の狂気の放埒のとき、社会排外主義がまさに社会主義者達の下で一般的たるべく迫られているとき、カール・カウツキーのような人々が「理論的」にジューデクムとハーゼの「社会主義的」社会排外主義を正当化し、ジュール・グストがミルランとともに内閣にあり、プレハノフが露仏同盟を弁護してドイツ軍国主義に対する戦争をロシア・コサックとニコライ・ロマノフの「文明」に訴えているとき。このようなときには、忠実に社会主義者であり続けようとする全ての者は抗議の声を挙げねばならない。

社会排外主義の流れがもっかきわめて強いことを、我々は隠しはしない。この伝染病は法外な拡がりで見受け入れられている。だがこのことは、

流れに抗して漕ぎ進む義務を決して免除するものではなく、逆に強く命ずるものである。たとえロシアにある我が全機関が今絞殺されようとも、たとえ我々の弱い声がさびしくしか反響しなくとも、社会排外主義の波浪に犠牲となった社会主義者達についての知らせがたとえ毎日のように絶えず新しくもたらされようとも。(1ページ→2ページ)

我々はおっかは少数である。だがロシアからの最初の知らせがすでに示しているように、我が国の階級意識にめざめた労働者はその義務を最後までつらぬく用意がある。そして社会排外主義の強権からの社会主義の来たるべき解放を全面的に信じつつ、我々は、このような困難なときに社会主義の旗を忠実に掲げ続けている人々には誰にでも、互いに手をさしのべるように呼びかける。

社会排外主義の諸潮流は、破壊的に征服をおこなっている。だが、我々は、

我々は、逆流をつくりだすだろう。

流れに抗して！

1914年11月1日

ゲー・ジノヴィエフ

V. 目 次

	(年代順に整頓された)	頁
序文	VII
前置きにかえて	IX
1. G・ジノヴィエフ、流れに抗して(『社会民主主義者』第32号) 1914年11月1日	1
2. N・レーニン、社会主義インターナショナルの現状と任務(『社会民主主義者』第33号) 1914年11月1日	2
3. G・ジノヴィエフ、戦争とロシア社会民主労働党(戦闘報道による)(『社会民主主義者』第34号) 1914年12月5日	7
4. 同上、革命的社会民主党のスローガン(『社会民主主義者』第34号) 1914年12月5日	10
5. N・レーニン、戦争についてのドイツ人の声(『社会民主主義者』第34号) 1914年12月5日	15

レーニンとジノヴィエフの『流れに抗して』

6. G・ジノヴィエフ、メンシコフの足跡の中で（『社会民主主義者』第34号）1914年12月5日 ……………16
7. 同上、一つの重大な記録文書（『社会民主主義者』第34号）1914年12月5日 ……………18
8. N・レーニン、死んだ排外主義と生きている社会主義（インターナショナルをどうやって再建すべきか？）（『社会民主主義者』第35号）1914年12月12日 ……………20
9. 同上、インターナショナルと祖国防衛（『社会民主主義者』第35号）1914年12月12日 ……………25
10. 同上、大ロシア人の民族的誇りについて（『社会民主主義者』第35号）1914年12月12日 ……………30
11. 同上、これからどうなる？（日和見主義と社会排外主義に対する労働者党の任務について）（『社会民主主義者』第36号）1914年12月12日 ……………33
12. G・ジノヴィエフ、英雄に非ず（『社会民主主義者』第36号）1914年12月12日 ……………39
13. 同上、1905年1月9日——1915年1月9日（『社会民主主義者』第37号）1915年2月1日 ……………41
14. N・レーニン、ロシアのジュデウム（『社会民主主義者』第37号）1915年2月1日 ……………42
15. G・ジノヴィエフ、ヴェイル事件とドイツ社会民主党（『社会民主主義者』第37号）1915年2月1日 ……………47
16. 同上、跪いている学生の姿（『社会民主主義者』第37号）1915年2月1日 ……………48
17. 同上、マルトフ転向のもっと先（『社会民主主義者』第37号）1915年2月1日 ……………49
18. 同上、戦争と我々の解放の運命（『社会民主主義者』第38号）1915年2月12日 ……………51
19. 同上、落伍兵（『社会民主主義者』第39号）1915年3月3日 ……………57
20. N・レーニン、警察と反動家達はドイツ社会民主党の統一をどのように保護しているか（『社会民主主義者』第39号）1915年3月3日 ……………64
21. 同上、ロンドン会議について（『社会民主主義者』第39号）1915年3

月 3 日66
22. 同上, ロシア社会民主労働党についての裁判は何を証明したか? (『社会民主主義者』第40号) 1915年 3 月29日67
23. 同上, ロンドン会議に際して (『社会民主主義者』第40号) 1915年 3 月29日72
24. 同上, 内乱のスローガンの説明のために (『社会民主主義者』第40号) 1915年 3 月29日74
25. G・ジノヴィエフ, ブルジョアジーの労働祭 (『社会民主主義者』第 41号) 1915年 5 月 1 日75
26. N・レーニン, 社会排外主義者の詭弁 (『社会民主主義者』第41号) 1915年 5 月 1 日78
27. 同上, 国際主義者の統合についての問題 (『社会民主主義者』第41号) 1915年 5 月 1 日81
28. 同上, ブルジョア博愛主義者達と革命的社会民主党 (『社会民主主義 者』第41号) 1915年 5 月 1 日84
29. G・ジノヴィエフ, 「恩赦」とその予言者達について (『社会民主主 義者』第42号) 1915年 5 月21日86
30. N・レーニン, プラトニックな国際主義の崩壊 (『社会民主主義者』 第42号) 1915年 5 月21日91
31. G・ジノヴィエフ, ドイツ社会民主党ときたるべきインターナシヨ ナル (『社会民主主義者』第42号) 1915年 5 月21日95
32. N・レーニン, 社会排外主義との闘争について (『社会民主主義者』 第42号の付録) 1915年 6 月 1 日 101
33. 同上, 帝国主義戦争における自国政府の敗北について (『社会民主主 義者』第43号) 1915年 7 月26日 105
34. 同上, ロシア社会民主党内の事態について (『社会民主主義者』第43 号) 1915年 7 月26日 109
35. G・ジノヴィエフ, 頭目クダシェフと共にバンダベルデはロシア社 会主義者の与論をどのように動かしたか (『社会民主主義者』第43号) 1915年 7 月26日 113
36. 同上, 平和主義かマルクス主義か (『社会民主主義者』第44号) 1915 年 8 月23日 115
37. N・レーニン, ヨーロッパ合衆国のスローガンについて (『社会民主	

レーニンとジノヴィエフの「流れに抗して」

- 主義者』第44号) 1915年 8月23日 …… 123
38. G・ジノヴィエフ, 尊厳な社会主義者諸公御自から (『社会民主主義者』第44号) 1915年 8月23日 …… 126
39. N・レーニン, 第2インターナショナルの崩壊 (『共産主義者』第1・2号) 1915年 …… 129
40. G・ジノヴィエフ, ロシア社会民主党とロシア社会排外主義 (『共産主義者』第1・2号) 1915年 …… 171
41. 同上, 追伸, プレハノフの作為について 1915年 …… 257
42. N・レーニン, フランスの一社会主義者の正直な声 (『共産主義者』第1・2号) 1915年 …… 258
43. 同上, イタリアにおける帝国主義と社会主義 (覚え書) (『共産主義者』第1・2号) 1915年 …… 265
44. G・ジノヴィエフ, 戦争とロシアにおける革命的危機 (『社会民主主義者』第45・46号) 1915年10月11日 …… 272
45. N・レーニン, 第一歩 (『社会民主主義者』第45・46号) 1915年10月11日 …… 277
46. G・ジノヴィエフ, 第一回の国際会議 (『社会民主主義者』第45・46号) 1915年10月11日 …… 281
47. N・レーニン, 1915年 9月 5日～8日の国際社会主義者会議における革命的マルクス主義 (『社会民主主義者』第45・46号) 1915年10月11日 …… 287
48. 同上, いくつかのテーゼ, 編集局から (『社会民主主義者』第47号) 1915年10月13日 …… 291
49. 同上, 革命の二つの方向について (『社会民主主義者』第48号) 1915年11月20日 …… 293
50. G・ジノヴィエフ, 我々の勝利 (『社会民主主義者』第48号) 1915年11月12日 …… 297
51. N・レーニン, 最後の一線にて (『社会民主主義者』第48号) 1915年11月20日 …… 304
52. 同上, 国際主義者の極まり文句による社会排外主義的政策の言い繕い (『社会民主主義者』第49号) 1915年12月21日 …… 305
53. G・ジノヴィエフ, 責め殺しに (『社会民主主義者』第49号) 1915年12月21日 …… 311

54. 同上, 合法下への滑り込み (『社会民主主義者』第50号) 1916年 2月
18日 …… 312
55. N・レーニン, 組織委員会とチヘイゼ派には独自の方針があるのか
? (『社会民主主義者』第50号) 1916年 2月19日 …… 316
56. G・ジノヴィエフ, 内乱についての詳細 (『社会民主主義者』第51号)
1916年 2月29日 …… 321
57. N・レーニン, ロシアにおける当面のスローガンとしての無併合講
和とポーランドの独立について (『社会民主主義者』第51号) 1916年 2
月29日 …… 327
58. 同上, ヴィルヘルム・コルプとゲオルグ・ブレハノフ (『社会民主
主義者』第51号) 1916年 2月29日 …… 330
59. 同上, 「講和綱領」について (『社会民主主義者』第52号) 1916年 3
月25日 …… 331
60. G・ジノヴィエフ, ツインメルバルトに従って (『社会民主主義者』
第52号) 1916年 3月25日 …… 337
61. 同上, ツインメルバルト・キエンタール (『社会民主主義者』第54・
55号) 1916年 6月10日 …… 341
62. N・レーニン, 単独講和について (『社会民主主義者』第56号)
1916年11月 6日 …… 355
63. G・ジノヴィエフ, 「ブント」の「国際主義」(『社会民主主義』
第56号) 1916年11月 6日 …… 362
64. N・レーニン, 全部で10人もの「社会主義」大臣 (『社会民主主義
者』第56号) 1916年11月 6日 …… 366
65. G・ジノヴィエフ, 戦争と平和 (『社会民主主義者』第58号) 1917年
1月31日 …… 367
66. N・レーニン, 世界政策の分岐点 (『社会民主主義者』第58号) 1917
年 1月31日 …… 376
67. 同上, 民族自決についての討論の成果 (『社会民主主義者』論集第 1
号) 1916年10月 …… 383
68. 同上, ユニウスの小冊子について (『社会民主主義者』論集第 1号)
1916年10月 …… 415
69. G・ジノヴィエフ, 以前と現在の「敗北主義」 (『社会民主主義者』
論集第 1号) 1916年10月 …… 427

レーニンとジノヴィエフの『流れに抗して』

70. 同上, 清算主義者達はどのように社会排外主義者になってゆくか （『社会民主主義者』論集第1号）1916年10月	…… 442
71. 同上, 第2インターナショナルと戦争問題。我々はその継承を拒絶 するのか？（『社会民主主義者』論集第2号）1916年10月	…… 453
72. N・レーニン, 「軍備徹廃」のスローガンについて（『社会民主 主義者』論集第2号）1916年10月	…… 502
73. 同上, 帝国主義と社会主義の分裂（『社会民主主義者』論集第2号） 1916年10月	…… 510
74. G・ジノヴィエフ, アドラーの突撃と社会主義の危機（『社会民主 主義者』論集第2号）1916年10月	…… 522
I. 人名索引	…… 531
II. 雑誌と新聞の目録	…… 535
III. 代表者会議と大会	…… 536

VI. 論文の掲載誌紙についての解説

以下の解説文は全て『レーニン全集』（邦訳、大月書店）の事項訳注から引用したものである。私達の紹介「II. 前置きにかえて（ジノヴィエフ）」の内容から得られる印象と以下の解説文から得られる印象とは少くいちがっている旨、おことわりしておく。

『ゾツィアル・デモクラート〔社会民主主義者〕』

ロシア社会民主労働党の中央機関紙、非合法新聞。1908年2月から1917年1月まで発行されていた。第1号はロシア国内で出されたが、その後、出版は国外にうつされ、はじめはパリで、のちにはジュネーブで発行された。中央機関紙編集局は、党中央委員会の決定によって、ポリシェヴィキとメンシェヴィキとポーランド社会民主党の代表から構成された。『ゾツィアルーデモクラート』には、レーニンの論文や記事が80以上も掲載された。編集局内で、レーニンは一貫したポリシェヴィキの方針をまもってたたかった。編集局の一部のポリシェヴィキ（カーメネフとジノーヴィエフ）は、解党派にたいして調停的な態度をとり、レーニンの方針の遂行を挫折させようと試みた。メンシェヴィキの編集局員マルトフとダンは、編集局内での活動をサボタージュすると同時に、他方では、『ゴーロス・ゾツィアルーデモクラータ』（『社会民主主義者の声』）で解党主義を公然と擁護した。レーニンが解党派にたいして容赦ない闘争を行った結果、1911年6月に、マルトフとダンが『ゾツィアルーデモクラート』編集局から退いた。同年12月から、『ゾツィアルーデモクラート』はレーニンによって編集された。この新聞にはスターリンの論文も多数発表された。

註

『ゾツィアル・デモクラート』についての以上の解説文は『レーニン全集』（邦訳大月書店）第17巻、600～601ページの事項訳注4を引用したものである。

レーニンとジノヴィエフの『流れに抗して』

ロシア社会民主労働党の中央機関紙、非合法新聞。1908年2月から1917年1月まで発行されていた。全部で58号出た。第1号はロシア国内で出されたが、その後出版所は国外にうつされ、はじめはパリで、のちにはジュネーブで発行された。中央機関紙編集局は、党中央委員会の決定によって、ボリシェヴィキとメンシェヴィキとポーランド社会民主党の代表から構成された。編集局内で、レーニンは一貫したボリシェヴィキ的方針をまもってたたかった。レーニンが解党派にたいして容赦ない闘争を行った結果、1911年6月に、マルトフとダンは編集局から脱退した。そして同年12月から、本紙はレーニンによって編集されることとなった。

第一次世界大戦の初期に、レーニンは、いままで一年間中断されていたこの新聞の復刊に成功した。1914年11月1日（新暦）に、本紙の第33号が出たが、これには、レーニンの書いたロシア社会民主労働党中央委員会の宣言が掲載された。戦争中にこの新聞に発表されたレーニンの諸論文は、戦争と平和と革命の問題についてのボリシェヴィキ党の戦略・戦術を実現するための闘争で、また、公然の隠然の社会排外主義者を暴露し、国際労働運動における国際主義的分子を結集するうえで、すぐれた役割を演じた。

1916年に編集局はべつに、『ゾツィアルーデモクラート論集』を2号出した。これには、レーニンの労作『社会主義革命と民族自決権（テーゼ）』、『自決にかんする討論の総括』、『軍備撤廃』のスローガンについて、その他が掲載された。

註

『ゾツィアルーデモクラート』についての以上の解説文は『レーニン全集』（邦訳大月書店）第23巻、409～410ページの事項訳注4を引用したものである。

「コムニスト〔共産主義者〕」

1915年に『ゾツィアルーデモクラート』編集局によってジュネーブで発行された雑誌。1号（第1＝第2号合併号）だけ出たが、これには、レーニンの論文『第二インターナショナルの崩壊』、『フランスの—社会主義者の正直な声』、『イタリアにおける帝国主義と社会主義』（本全集、

第21卷所収) が掲載された。

雑誌の編集局の内部で、レーニンは反党的なブハーリン＝ピャタコフ・グループにたいして闘争を行い、その反ボリシェヴィキの見解を暴露し、雑誌を分派の目的に利用しようとするその企図をあばきだした。このグループが反党的立場をとったため、レーニンは同グループと関係を断つこと、雑誌の共同出版をやめることを提案した。1916年10月から、編集局は『ゾツィアル＝デモクラート論集』を出しはじめた。

註

『コムニスト』についての以上の解説文は『レーニン全集』(邦訳 大月書店) 第23巻、419～420ページの事項訳注 115を引用したものである。

『ゾツィアル・デモクラート論集』

ロシア社会民主労働党中央機関紙『ゾツィアル＝デモクラート』の編集局の手によって、レーニンの直接の指導のもとに発行された論集。1916年10月に第1号が、12月に第2号が出た。さらに第3号の計画もたてられたが、発行されなかった。

註

『ゾツィアル・デモクラート論集』についての以上の解説文は『レーニン全集』(邦訳 大月書店) 第23巻、412ページの事項訳注 31を引用したものである。

Ⅶ. 『レーニン全集』との照合

『流れに抗して』中のレーニン執筆部分が『レーニン全集』(邦訳 大月書店) 中のどの巻に見出されるかを示した。

論文番号及び論文名	著作年月日	掲載誌	全集第5版	全集第4版	全集邦訳版
序文(論集『流れに抗して』の)	1918		㉖ 124	㉗ 194	㉘ 225-226
2. 社会主義インターナショナルの現状と任務	1914. 11. 1	S第33号	㉖ 36~42	㉗ 19~24	㉘ 22~28
5. 戦争についてのドイツ人の声	1914. 12. 5	S第34号	㉖ 94~95	㉗ 75~76	㉘ 82~84
8. 死んだ排外主義と生きている社会主義(インターナショナルをどうやって再建すべきか?)	1914. 12. 12	S第35号	㉖ 98~105	㉗ 77~83	㉘ 85~92
9. インターナショナルと祖国防衛	1914. 12. 12	S第35号			
10. 大ロシア人の民族的誇りについて	1914. 12. 12	S第35号	㉖106~110	㉗ 84~88	㉘ 93~97
11. これからどうなる?(日独親見主義と社会排外主義に対する労働者党の任務について)	1914. 12. 12	S第36号	㉖ 111~118	㉗ 89~96	㉘ 98~106
14. ロシアのジュデウム	1915. 2. 1	S第37号	㉖ 119~125	㉗ 99~104	㉘ 110~117
20. 警察と反動家達はドイツ社会民主党の統一をどのように保護しているか	1915. 3. 3	S第39号	㉖ 155~157	㉗ 109~111	㉘ 122~124
21. ロンドン会議について	1915. 3. 3	S第39号	㉖ 158~160	㉗ 112~114	㉘ 125~127
22. ロシア社会民主労働党についての裁判は何を証明したか?	1915. 3. 29	S第40号	㉖ 168~176	㉗ 149~154	㉘ 163~169
23. ロンドン会議に際して	1915. 3. 29	S第40号	㉖ 177~179	㉗ 155~157	㉘ 170~172
24. 内乱のスローガンの説明のために	1915. 3. 29	S第40号	㉖ 180~181	㉗ 158~159	㉘ 173~174
26. 社会排外主義者の詭弁	1915. 5. 1	S第41号	㉖ 182~186	㉗ 160~164	㉘ 175~180
27. 国際主義者の統合についての問題	1915. 5. 1	S第41号	㉖ 187~191	㉗ 165~168	㉘ 181~185
28. ブルジョア博愛主義者達と革命的社会民主党	1915. 5. 1	S第41号	㉖ 192~194	㉗ 169~170	㉘ 186~188
30. プラトニックな国際主義の崩壊	1915. 5. 21	S第42号	㉖ 195~200	㉗ 171~175	㉘ 189~194
32. 社会排外主義との闘争について	1915. 6. 1	S第42号	㉖ 201~205	㉗ 176~180	㉘ 195~200
33. 帝国主義戦争における自国政府の敗北について	1915. 7. 26	S第43号	㉖ 286~291	㉗ 247~252	㉘ 247~284
34. ロシア社会民主党内の事態について	1915. 7. 26	S第43号	㉖ 292~297	㉗ 253~258	㉘ 285~291
37. ヨーロッパ合衆国のスローガンについて	1915. 8. 23	S第44号	㉖ 351~355	㉗ 308~311	㉘ 349~353
39. 第2インターナショナルの崩壊	1915	K第1・2号	㉖ 209~265	㉗ 183~232	㉘ 201~261
42. フランスの社会主義者の正統な声	1915	K第1・2号	㉖ 5~13	㉗ 316~323	㉘ 358~367
43. イタリアにおける帝国主義と社会主義(覚え書)	1915	K第1・2号	㉖ 14~23	㉗ 324~333	㉘ 368~378
45. 第一歩	1915. 10. 11	S第45・46号	㉖ 37~42	㉗ 350~355	㉘ 397~403
47. 1915年9月5日~8日の国際社会主義者会議における革命的マルクス主義	1915. 10. 11	S第45・46号	㉖ 43~47	㉗ 356~359	㉘ 404~408
48. いくつかのテーゼ、編集局から	1915. 10. 13	S第47号	㉖ 48~51	㉗ 366~368	㉘ 416~419
49. 革命の二つの方向について	1915. 11. 20	S第48号	㉖ 76~81	㉗ 378~383	㉘ 428~434
51. 最後の一線にて	1915. 11. 20	S第48号	㉖ 82~83	㉗ 384~385	㉘ 435~436
52. 国際主義者の極まり文句による社会排外主義的政策の言い繕い	1915. 12. 21	S第49号	㉖ 84~92	㉗ 392~399	㉘ 442~451
55. 組織委員会とチヘイゼ派には独自の方針があるのか?	1916. 2. 19	S第50号	㉖ 240~245	㉗ 120~125	㉘ 149~156
57. ロシアにおける当面のスローガンとしての無併合講和とポーランドの独立について	1916. 2. 29	S第51号	㉖ 246~249	㉗ 126~129	㉘ 157~161
58. ヴェルヘルム・コルプとゲオルグ・プレハノフ	1916. 2. 29	S第51号	㉖ 250~251	㉗ 130~131	㉘ 162~164
59. 『講和綱領』について	1916. 3. 25	S第52号	㉖ 267~274	㉗ 150~156	㉘ 187~195
62. 単独講和について	1916. 11. 6	S第56号	㉖ 184~192	㉗ 114~122	㉘ 134~143
64. 全部で10人もの『社会主義』大団	1916. 11. 6	S第56号	㉖ 193~195	㉗ 123~125	㉘ 144~146
66. 世界政策の分岐点	1917. 1. 31	S第58号	㉖ 339~348	㉗ 256~264	㉘ 256~299
67. 民族自決についての討論の成果	1916. 10	S・S第1号	㉖ 17~58	㉗ 306~344	㉘ 372~422
68. ユニウスの小冊子について	1916. 10	S・S第1号	㉖ 1~16	㉗ 291~305	㉘ 353~371
72. 『軍備撤廃』のスローガンについて	1916. 10	S・S第2号	㉖ 151~162	㉗ 83~93	㉘ 100~111
73. 帝国主義と社会主義の分岐	1916. 10	S・S第2号	㉖ 163~179	㉗ 94~109	㉘ 112~129

レーニンとゾノヴァエフの『流れに抗して』

註

1. 論文番号及び論文名は、『流れに抗して』の目次で示された論文番号であり、論文名である。
2. 著作年月日は、各掲載誌の発行年月日で示している。
3. 掲載誌欄のS, K, S・Sは、S…“Sozialdemokrat”, K…“Kommunist”, S・S…“Sammelbuch des Sozialdemokrat”を略号で示したものであり、号数は各々の号数を示している。
4. 全集第5版とは『レーニン全集』第5版である。
5. 全集第4版とは『レーニン全集』第4版である。
6. 全集邦訳版とは『レーニン全集』邦訳・大月書店版である。
7. 全集第5版、全集第4版及び全集邦訳版欄の巻数及びページは、さきに○中の数字で巻数を示し、そののちの数字でページを示している。

An Introduction to "Against the Stream",
a Collection of Articles written by N. Lenin
and G. Sinowjew, on its Form and Matter.

Hitoshi KOJIMA and Kenji ABE